つつあるのである。

人類に現はるる自然的性質と人爲的性質　右に述べた點から考へて見ると、人類の進化と他の動物の進化とを同一面上に置いて論ぜんとする事の不合理であることが直ちに判明する。人類の社會及び文明の進化に關する問題と自然界に於ける生物進化の問題とは全然その規を異にする。なぜなれば前者は人爲的の産物であり、後者は遺傳法の支配下にある問題であるからである。ところで人類は親より繼承した幾多の性質を身に具へて世に生れ出る。卽ち動物人としては云ふまでもなく遺傳法の支配下にあるのであるが、長ずるに從ひ人爲的で後天的に獲得した樣々な性質がつけ加はつて來て社會人たる特性を多分に持つやうになる。勿論各種の動物にも同樣な現象が現はれはするが、この二つの事項の重要さが、人と動物とでは著しく異つてゐる。卽ち動物では形態上の特質並びに本能等の如き、持つて生れた性質が非常に重要性を帶び、出生後添加される性質の如きは論ずるに足らぬ程度に終つてゐるが、人類にあつてはそれが逆であつて、親から遺傳した諸般の性質も重要ではあるが、成人するに連れて環境の影響によつて添加される性質、特にその智的性質は人類にとつて非常に重要で、その生涯を通じて、至大な影響を與へるやうになる。然しかくの如き性質は普通一般に考へられてゐる遺傳現象の埒外のもので、旣に反復述べたやうに、社會遺傳と云ふ現象によつて、甲の時代から乙の時代へと傳へられる。

人類と二樣の遺傳　生物學的遺傳と社會遺傳とは人類に何を寄與するのであるか、吾人は最後にこの問題に觸れて見なければならない。先づ最初に前者に屬する事項から考へて見ると、人類が直立して步行し得ること、器用に動く手を具へてゐること、他に類例の無いよく發達した大きな腦を與へられてゐること等は、他の動物の追從を許さざる勝れた性質であつて、それ等が文明の世界を現出せしむるのに大いに役立つたことは云ふまでもない。それ等の性質は凡ての動物がその肉體的諸性質を親から繼承する際に作用するのと同じ遺傳の法則によつて人類に賦與されたのであるが、異常に發達した腦が與へて呉れた智力が、文化の建設に與つて力があつたのであるから、社會進化は生物學的遺傳に負ふところ極めて多しと云ふことができる。然し人類の社會進化に關しては、最初は智力よりも寧ろ道德性がより重大な影響を與へたのであるから、道德的本能の遺傳狀態を考察して見ることが必要になる。

人類の間に存する道德律が社會遺傳によつて次第に繼承されるものであることは云ふまでもない。元來道德律と云ふものは人爲的の産物で、時代と共にその內容が變化する。これは人と人とが集つて大きな集團を形成した際に、社會生活をより安易にするために編み出されたものであつて、どこまでも二次的の産物で所謂遺傳とは全然無關係である。次に又社會の基礎である家庭の結成と云ふことは有機的遺傳の影響をも多分に受けてゐるのである。親の子に對する愛は人類の

家庭が發達する礎石となつたことは既に述べた通りであるが、その愛が力强く働くやうになつたのは、扶養期間が長くて親子相接する時が意外に長いからであるが、扶養期間が長いと云ふことは先天的性質であつて、これは所謂有機遺傳の範圍内に屬する問題である。然し家庭を固く結合せしむる熱烈なる親子の愛情は、親と子との長期に亙る接觸によつて燃え出るのであるから、これは社會遺傳の範圍に屬する。このやうに社會結成の基調なす家庭そのものは、最初は有機遺傳の支配を受くる性質を基として結成されるが、それから以後は社會遺傳に基づく衝動によつて發達の途を辿つて行く。遺傳的惡德者の系統として有名な米國のカリカック並びにヂュークス一家の如きは例外として、人が不德な行爲を爲すか爲さないかは、持つて生れた道德性の如何によるのではなくて、生を託する環境の如何による場合が少くないのである。

下層階級の者の心理狀態を研究した社會學者の云ふところによると、罪人として處罰された者十名の内少くとも三名は良き環境を與ふれば本然の性質に立ち返る可能性があると云ふ。孟母三遷の根本原理もここに存するのであると思ふが、さればとて親から賦與された遺傳的性質が環境の如何によつて變化すると云ふのではなくて、この事實は環境が人と生活狀態との關係に變化を來さしむることを物語つてゐるのである。卽ち同じ水準の德道性を持つてゐる二人の人間を異つた環境の下に置くと、兩者の日常の行爲が全然異つたものとなり、その善惡感まで時に非常な差

を示すやうになることは贅言を費す必要のないことである。

人各々には固有な道德性を築き上げる基礎となる性質があるのであつて、その性質を父祖から繼承して我等は世に生れ出るのである。かかる先天的な道德性が環境の影響を受けて樣々に姿を變へるのであるが、生れながらにして潛在してゐる道德性は、日本人と歐米人とでは著しく違つてゐるやうに、今日の道德性が發現した原料とも云ふべき父祖から繼承したままの德性は、人種により個體により著しく選を異にする。然し孰れにしてもかかる先天的に潛在せる道德感が人を正しと信じたことを遂行するやうに導くのであるが、人をして何が正しきかを決定せしむるには、社會遺傳の力が與つて力あることを思はざるを得ない。既に述べた通り、道德律は人各々が生を託してゐる周圍の狀況によつてその趣を異にするが、自己が育て上げられた社會の道德律に從はねばならぬやうに强要するその衝動は、凡ての種族を通じて絕對的な命令權を持つてゐると云つてよい。かくの如き道德感は社會遺傳の結果として生れ出るのか或は父祖から遺傳の法則に從つて繼承するのか、その點が問題になるが、正しきに從ひ惡を避けんとするその衝動は、吾人々類の持つて生れた本質の一部であつて、教育の結果現はれて來る性質ではないやうに思はれる。若し然りとせば、そのやうな道德感は一般動物を支配するのと同じ進化の法則によつて左右されるものと云はねばならぬが、果してそれが事實であるかどうか、卽ち道德感は社會遺傳とは

全然關係が無いのであるかどうかと云ふと、その點の解決は頗る困難である。

第六章に於て述べた通り、道德は幾分訓練によつて向上發達するものであることを信ずべき理由があるのである。して見れば社會遺傳も亦道德感と相關性を持つことになる。然し道德感が後天的に訓練によつて發達すると考へることに對しては、反對の意を表する學者が少くないのであつて、それ等の人々は、道德感は飽くまでも人類の身に具はつた天賦の性質であると主張する。そして或る系統の家には高い道德感が、又或る系統の家には低い道德感が代を重ねて現はれる現象を指摘し、これは飽くまでも遺傳的現象で、訓練により後天的に變革される性質のものでないことを强調する。然しこれに對して反對論も現はれてゐるのであつて、幼兒が長ずるに從つて正邪善惡の觀念を獲得するのは、兩親その他周圍の人々より教へられた結果であるから、道德性が先天的の性質であると斷定することは不合理であると云ふ。その孰れが正當であるかを判定する事は困難であるが、吾人の立場からこれを批判するとその所說の孰れにも一理あるのであつて、その一方に極端に傾くことが誤斷の基となるやうに思はれる。

凡て人は利己的本能と利他的本能とを父祖から遺傳するのであるが、そのやうな本能の發現振りは個體により家庭により著しくその趣を異にする。卽ち或る一家の者は非常に利己的であるのに他の一家の者には利他的本能が著しく發達する。換言すれば崇高な道德性を身に具へた人の子

女は概して道德的に勝れた性格の持ち主であり、德性に於て缺くるところのある者の子女は親と同じ低調な人間となるのであつて、かかる點から論ずれば、道德性は先天的の性質で、生物學的遺傳の範圍內に屬するものであると云ひ得ると思ふ。然しかくの如き本能が教育により訓練により、著しく姿を變へることも動かすべからざる事實である。卽ち教育された結果初めて燃え出づる良心もあるのであるから、道德性は社會遺傳とは無關係であるとは云ひ難い。人は生れてより死に至るまで絕えず環境の影響を受けつつあるのである。そして他の動物の孰れよりも感受性が强いので、成長期にあるものは特に環境の作用を强く受ける。從つてかやうにして成人した者の道德性は、父祖から繼承したものよりも、社會遺傳的の訓練によつて後天的に附加された分子の方が强く現はれる。

總括　文明は人類の家庭から發足したものであると同時に、人類を結合させて社會の單位である家庭を構成せしめたのは道德性の作用によつたのであると云ふことを許容すると、文明は生物學的遺傳によつて親から子へと遺傳せらるる性質を基礎として築き上げられたものであると云ふことになる。それ等の遺傳的性質を訓練や教育によつて變化せしむることは不可能であつて、それ等を向上發達せしむるためには交配又は淘汰等の方法に倚賴しなければならない。ところで、文明の建設に役立つたそれらの礎石以外の諸性質は、前者と全然異つた方法で人類に附與された

のであつて、それ等に關しては生物學的遺傳よりも社會遺傳の方がより強く作用する。

概括的に云へば、人類の肉體・智能・社會生活を營ましむる本能、滅私奉公の精神に活くる本能等は凡て生物學的遺傳の支配下にあるが、後天的にこれ等の礎石の上に添加される諸性質は凡て社會遺傳の支配下にあると云ひ得るのである。社會と云ふものは生物學的遺傳によつて築き上げられた基礎の上へ社會遺傳によつて積み上げられた添加物と云つて然るべきものである。若しも人類にこの添加物が與へられずに只生物學的遺傳に屬する性質のみが附與されたとしたならば、人類は賢明な動物であると云ふに止まつたであらうが、幸にして社會遺傳による諸性質が添加されたため他の動物と非常に引き離されるやうになつたのである。

以上の點に關し章を重ねて述べ來つたところを左に要約して見る。

1 社會進化は人類社會の組織が絶えず進歩發展することによつて證據立てられる。

2 社會が強大となるに連れて個體の價値が高まつて來る。

3 言語があつて初めて社會の結成が可能となつたのであるが、そのやうに重要性を帶びてゐる言語は徐々に發達したもので、自己の經驗により人類は多大の勞苦を費してそれを造り上げたのである。

4 自然淘汰は今尚變らぬ力を以て人類の上に働きかけてゐる。然しその作用は社會を結成したために生じた樣々な新情勢によつて歪曲せられ、時にはそれを認めることが頗る困難な場合がある。

5 社會進化は自然淘汰によつて齎らされたのではなくて、時に犧牲を要求したり、他の動物を支配する自己保存と云ふ基礎的衝動とは全然背反する行爲を强要する道德性の作用によつて齎らされたのである。

6 道德性は人類の本質中に潜在する本能の衝動に基づいて現出する。

7 社會が進歩發展するに從ひ、道德的本能が作用して社會の會員が協調的な生活を送り得るやうに導く道德律を造り出す。かやうな道德律の基礎事項は、凡ての人類を通じて殆ど同樣であるが、その道德律を生じた社會情勢が異るに連れて著しくその內容を異にする。

昭和十六年三月十日印刷
昭和十六年三月十五日發行

科學新書

5

人類の進化

㊟ 定價 一圓二〇錢

著者 大島正滿

東京市日本橋區通三丁目一番地
發行者 河出孝雄

東京市神田區三崎町二ノ一二
印刷者 加藤保

發行所 東京市日本橋區通三丁目一番地 河出書房
電話日本橋(24)二七七七、一七四八番
振替口座東京一〇八〇二番

加藤文明社印刷所

769
76

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black